

瀬戸内を楽しむ

富士通研究所 大 脇 健 一



宮島の沖

漁業組合長

私のボート歴は可成り長くかれこれ50年になるであろう。初めは手漕だったが約15年前からパー・ボートに転じた。最初の艇の船体はベニア張りの手製で、長さ約9呎エンジン東発の2.5馬力、これで明石海峡を横断した。次はヤマハの12呎エンジンはジョンソンの20馬力だったが、明石から播磨灘を斜断小豆島経由高松迄遠征した。“本洲から四国へこんな小舟で来たのは貴兄が初めてだろう”とマリーナで驚き且つあきれられた。現在はスタークラフト社の16呎にマークルザー140馬力を積み、東は淡路から西は広島迄の内海域を走っているが、昨年だけで約4500軒は航行したことになる。人呼んで“漁業組合長”“ボート屋の親父”という。

クルージング

還暦の年に“小型船舶操縦士”の免許を貰い、子供の頃の船長になりたいという夢を実現出来大へん喜んでいる。しかし免許を貰ったから直ちにボートが乗り廻されるかという、そう簡単にはいかない。少くともクルージングする為には先ず海を、特にその恐しさを知らねば

ならない。又天気の変化の予測がある程度出来ねばならない。いやいや最も大事なことは情勢によって計画を変更し、時には中止する勇気と決断が最大の要素であろう。

しかし時には俄雨に突風に又霧に出合うこともある。俄雨が特に雷をともなってやって来そうな時、これを予め察知し島影に避難出来た時の嬉しさ、突風で突然の高浪に出合いそれを上手に乗り切った喜び、霧の中を海図とコンパスのみで目標地点に到達した時の安堵感等々、適切な判断と処置に成功した時の喜びは何時迄も忘れられない。吾々は自然との戦いに勝つのではなく、自然に如何に順応するか、如何に融和するかにある。人間の知恵も体力も自然の偉大さに比ぶれば物の数ではない。かかる体験が俗世界の忿懣をストレスを解消してくれる。

海水泳湯に乗り入れてこれ見よがしに走ったり、静かに釣糸をたれている釣船のそばをフルスピードで走ったり、他人の犠牲で楽しむのではなく、港や島の歴史を訪ね、自然の造形美を岬や磯に見出し、ボートングの技術そのものを楽しむ等の為に私はクルージングしている。

港・島・岬

瀬戸内には歴史上色々の役割をはたした港や島が沢山ある。

女郎の発生地ともいわれ又“お夏清十郎”の悲恋物語りの主人公清十郎の出身地でもあり又その他幾多の恋物語りを持つ室津の港、その昔朝鮮からの来聘使が泊ったと伝えられている古寺本蓮寺がある牛窓の港がある。牛窓では秋には唐子踊りが行われ朝鮮風の服装をしたこどもの踊り子が登場するといわれている。又その昔瀬戸内を上り下りする船が風待ちに船をとめると、その船めがけて一勢に漕ぎよっていった

“おちょう船”で有名な御手洗^{みたらい}や木の江の港はそれぞれ大崎下島上島にある。このおちょう船は先を争う為非常にスピードが出るように設計され且つ作られたいたとかで、その船造りの伝統が現代も尚残っており幾多の造船所がある。特に木の江のある大崎上島には商船高等専門学校がある外両港に工業高校がおかれているのは面白い。

又島の話となるとその数も多く周囲100米以上の島の数は740島、その内名称のあるものは650島と言われているが、その島の多くは無人島でその数は島の75%にもなると聞いている。しかしそれ等の島の内には有名なものも沢山ある。

24の嶺で有名な岬の分校を持ち、ネリーブと醤油を名産とし、又第3紀層の花崗岩に集塊石がかぶさり且つそれが同化水食作用でいたる所に洞窟や石門を作っている紅葉の名所寒霞溪のある小豆島、巖島神社のある宮島、又その者この神社の建立を争ったと言われる鞆の仙酔島、神功皇后が三韓征伐のみぎり船を止めたとかで名付けられた皇后島、又御手を洗われたとかで御手洗と名付けられた港を持った大崎上島、又同皇后が戦勝を祈って冠や大小の沓（くつ）を争に投げ入れた際、その大沓が流れついたことで大沓島と呼ばれていた今の大久野島、鬼が住んでいたとの伝説のある鬼ヶ島こと女木島、灯台守の歌に出て来る灯台のある男木島等々。

又瀬戸内を語る時忘れてはならぬものに海賊がある。塩飽海賊の拠点塩飽群島には六口島、櫛石島、長島、向島、本島、広島、三島等々があるがその勤番所であった本島は又の名を“人名^{じん}”の島という。この海賊はたしか秀吉時代から徳川時代に功績があり、佩刀を許され武士と町人の間に位する人名なる地位が与えられた

とのことである。本島の中学校の一隅に幾人かの人名の墓があり、その山頂に登ると東は小豆島から西は因ノ島群島迄が一望に見渡せる絶景でありその昔海賊の見張には絶好の地であったであろうと頷ける

又因ノ島群島は村上水軍の根拠地で島々に幾多の城跡がある。北は尾道水道であり南は来島海峡で共に急潮であるが、又この間に南北に点点と存在する島々の背の瀬戸は何れも早瀬である。このような状態でこれ等の島々に城を持った海賊がいたのでは、如何ともし難かったであろう。

又因ノ島群島の中で特に大三島と生口島は有名である。前者には樹令2600年といわれる楠の木を中心にした神域を持つ大山積神社があり、海神として鎌倉時代より信仰を集めている。又同社の柴陽殿には甲冑、鎧、刀剣が多く奉納されており、真偽の程は知らないが源義経の赤糸織の鎧や、高野道有が元寇の戦で使った鎧、弁慶のナギナタ等々結構半日は楽しめる。又生口島には金本耕三和尚が母親への孝養に建てたという耕三寺がある。西の日光とも言われるあてやかなものだが、訪れる人々にそれぞれ何等かの思いを与えるであろう。

又瀬戸内で最も風景が美しいと言われる鷺羽山、鯛網を楽しめる鞆等々の岬も又良い。

島での俳句

俳句の何たるも知らぬ筆者が訪れた島で作ったものの中から2～3。

六口島砂に刻みし忍の文字（六口島）
誰持つや無人の島に月見草（松島）
瀬戸内に勝手気ままの島や島（本島）
松風の窓へ訪う島の宿（弓削）
物言わぬ磯の巖の幾星霜（赤穂岬）